



Volume 21
Hamada Yasuyuki

資本主義という 海を進む 協同組合という 船への期待

わたしは経済学者として金融論や中小企業論を専門に研究し、長きにわたって大学で教鞭を執ってきました。しかし、大学を卒業して初めて就職したのは系統農協だったのです。全販連（全国販売農業協同組合連合会）という存在をなにかで知り、就職活動の一環として訪ねてみようと考えたのです。ところが、わたしが実際に就職したのは全購連（全国購買農業協同組合連合会）でした。全販連と全購連のちに合併して

現在のJA全農になるわけですが……。就職して一年後には大学の恩師から声がかかり、学者としての道を歩むことに。でも、二、三か月に及んだ農家研修は貴重な経験だったと、いまだに思い出されます。朝から晩まで作業服を着てブタの世話に明け暮れました。農家と直接ふれあったのは、そのときだけ。それが、いろいろな物事を考えるときの基本となったのです。

協同組織 だからこそ 強みとは

学者になってからも、「協同組織（組合）」という言葉がわたしの頭から離れたことはありません。金融の世界にも協同組織金融機関があります。信用金庫や信用組合、そしてJAも含まれます。一般に、お金という単一商品を扱っている金融界においては、規模が大きいほうが圧倒的に有利です。ところが日本では、規模の小さな協同組織金融機関がたくさん生き残っている。それはなぜか？——わたしの学問的興味はそこにあったのです。

JAの場合は総合事業を展開し、金融事業ではない点が、農村地帯や地方都市における円滑な金融に寄与しています。たとえば利用者から「作物の転換をしたい」「休耕田を活用してくれと頼まれているが、お金がかかる」といった相談があれば、JAならば、どれくらいの資金が必要で、どれくらいの返済期間があれば返せるかを判定できるはず。これが他の金融機関となるとそうはいきません。

JAが果たすべき役割は金融だけではあ

りません。農業や農村をめぐる現代の課題にたいし、組合員と共に立ち向かう必要があるでしょう。たとえば社会的関心が高い「食の安全」については、生産者と消費者とのあいだに入り、「これは安全です」という担保を付けられる存在でなければなりません。農へ



農業は

この国のあり方、
風習や歴史、
伝統などが
込められている
文化なのです

畜産物の安定供給については、一国の自立という問題がかかっています。こうした問題を解決するには、利益追求を前面に掲げる株式会社より、みんなが解決することを前提にした協同組合のほうが適しています。農地保全とおしな自然環境の維持についても同様です。な

農業は この国の 文化そのもの

ぜなら、そのこと自体が利益に直結するわけではないからです。もし株式会社が取り組むとしても、まず利益を上げてから、次にその使い道として考えることになり、後回しになってしまいます。

一方で、JAという協同組合の「船」は資本主義という「海」の上に浮かんでいることも忘れてはいけません。沈没してしまえば、元が協同組合であったか、株式会社であったかなどは関係ないのです。競争に勝ち残ってこそ協同組合という存在であり続けられるわけです。

併せて、農業は心を耕す存在、つまり文化的意味も持っていることを広く国民に訴える努力が必要でしょう。学生に夏休みのあいだだけでも農業を体験してもらおう工夫も有効です。農業はこの国のあり方、わたしたちが育ててきた独特の風習、歴史、伝統、そうしたものをすべてが込められている一つの文化なのです。JAは、広く社会に受け入れられてこそ存在できることを、思い起こすときではないでしょうか。

全国大学生協共済生活協同組合連合会 会長理事
(公財)はまなす財団 理事長

濱田 康行 さん

まとも／小澤啓司
写真／石塚修平
（家の光）編集部

Hamada Yasuyuki

はまだ・やすゆき／
一九四八年、神奈川県横浜生まれ、北海道大学名誉教授。現在は大学生協共済連会長理事のほか、北海道の地域振興を応援する（公財）はまなす財団理事長などを務めている。